

Fate/Grand Order～愛  
は人理を救う～

100?ライター

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

『30分で5万！』

目も当てられないくらい馬鹿な理由でカルデアへ申し込んだ底辺魔術師蓮井蓮。

そんな彼がたまたま数少ないマスターとして生き残ってしまったので既にいたもう一人のマスターと共に人理修復への旅へ身を投じることに…

だが、彼にはとある人物による細工がされており…

タグは随時追加していきます。

作者の文才は相変わらずです。

# 目次

最初のオーダー!	1
スーパークルト人メイヴちゃん	7

## 最初のオーダー!

ここを一言で言い表すならば『世紀末』。俺が知っている冬木は何処にもなく、あるのは絶えず燃える炎、崩壊した無数の建物のみ。

話によれば未だ聖杯のために争うわずかなサーヴァントやレイシフトしたもう一人のマスターとそのサーヴァント、他にカルデアの所長がいるらしい。

だが…

「本当に…どうしてこうなったんだっけか」

く

無論、改めて考えれば何が悪いかは分かっている。カルデアとかいうよく分からないやつの募集要項をよく見ずに申し込んでしまったからだ。

『30分で5万!』

今思えばちよつとした破滅願望もあつたかもしれないが、それを加味してもこんなものにつられて即申し込む俺は中々に馬鹿である。

でも仮に何かあつても俺だつて一応は魔術師の端くれ。特に問題ないと思つていた。

しかし、目の前の現実はそんなに甘くはなかつた。

広いカルデアでちよつと道に迷つたと思いきや急に火事が起き、カルデアの機能の大半が停止。後で聞いた話だと47人のマスターが凍結状態に陥つたのだという。

唯一会つた緑の帽子のおじさんに正しい道を聞いていたら俺もそうなつていたのかもしれないと思うと少しゾツとする。

く

「くそっ! ついさつきカルデアからの通信は途絶え、もう一人のマスターも見つからない! おまけにサーヴァントはまだ召喚出来ていない! 急いでどつかで召喚しないとな

！」

だが、敵もサーヴァントの召喚をそう易々とはさせてくれない。恐らくキャスター辺りが呼んだやつであろう竜牙兵が何体もこっちに向かってきている。

「邪魔だ！」

俺の唯一まともに使えるガンドで確実にブチ抜く。もちろん強化の魔術も不可能ではないが、元の身体能力が低いのでお察し。

「よし、これでしばらくは大丈夫だろう」

一通り倒したので次は召喚。触媒はないから誰が来るかは分からないが、今は贅沢なんて言ってられない。あっちのマスター達と合流する前に死にましたとか洒落にならない。

まさか俺がサーヴァントの召喚なんて事をやるとは思わなかったが…仕方ない。俺

がやるしかない。

「素に銀と鉄。礎に石と契約の大公。

降り立つ風には壁を。四方の門は閉じ、王冠より出で、王国に至る三叉路は循環せよ」

「閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。」

「繰り返すつどに五度

ただ、満たされる刻を破却する」

「——告げる

汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に

聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ」

「誓いを此処に

我は常世総ての善と成る者、我は常世総ての悪を敷く者」



「汝三大の言霊を纏う七天

抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ——!。」

初めての召喚だったのでやけに緊張したが、どうやら召喚は無事に成功したらしい。俺は目の前に現界したサーヴァントを確認しようと目を見開いた。

「サーヴァント・ライダー」

目の前にいた彼女は全体的に白を基調とした服と同じく白くてもふもふとしたコートを身に纏い、鞭を携えていた。

「いえ、こう言った方がいいかしら? 私は女王メイヴ。よろしくね、マスター」

女王メイヴだと…? あのフェルグスに『身体以外は最低な女』と言わしめたあのメイヴか。

「貴方の名前は?」

ああ、本来最初にするべき自己紹介がまだだったか。

「俺の名前は蓮井蓮<sup>はすいれん</sup>。よろしくな、メイヴ」

## スーパーケルト人メイヴちゃん

女王メイヴ。ものすごく簡潔に言えばクー・フリーンを死に追いやった反英雄である。

一体何故メイヴが来たのか心当たりが全くない

はっ！冬木の聖杯戦争にはクー・フリーンがいる！もしかしてそれが…いや、違うか。メイヴが知っているはずもないし、考えすぎだな。

「ん？私のために戦ってくれる勇敢な戦士は？」

「いない」

「じゃあ、貴方が戦ってくれるの？」

「見りやわかるだろ？この通り近接格闘は論外だ」

「はあ…」

露骨にため息つくのやめてくれませんか？一応俺マスターなんですけど。

「だが、まずはあいつらの始末が先だ」

少し前にいなくなったかと思いきや…また出てきたな。全く…

「マスターの力、お手並み拝見といかせてもらおうわ」

「俺としちやお前の力のお手並みを拝見したいんだがな」

サーヴァントなのに冷たいなあ…でも戦闘の準備は出来ている。あとは撃つだけ。急所を的確に。

「くらえー！」

流石に遠坂凜のガトリングレベルの連発は無理だが、そこそこ射程はあるし、ちゃんと狙って撃てばこの程度の相手は一撃だ。

数もそんなに多くないし、近づいてくる前に十分捌ききれぬ量のはず…

「ちっ！後ろから湧いて来やがー」

「ふっ！」

思わず見惚れてしまいそうなくらい鮮やかで強烈な後ろ回し蹴り。

自分は戦わないと言っておきながら…俺はメイヴのことを少し誤解していたかもしれない。

「ギリギリ及第点。つてところかしら…」

「マスター、こいつらの出所がサーヴァントなら倒せばいなくなる。そうじゃなくてもまずは他のサーヴァント探すわよ」

「了解。雑魚はともかく、サーヴァント戦は任せる。いいな？」

「仕方ないわね。その時は見せてあげるわよ、私の本当の力！」

）

「ふふ、どうやらやつに仕掛けたあれは上手くいったようだな」

あの二人が予定通り来なかったのは予定外だが、何の問題もない。

一人はただの一般人。もう一人にはあの仕掛けがしっかりと作動している。

「藤丸立香、蓮井蓮。お前達にはちゃんと消えてもらおう」

）

「ん、いたぞ。サーヴァントらしいやつ！」

鎌を持ったサーヴァント。周りに張つてある鎖も恐らく彼女のものだろう。

「あの武器…見たところランサーかしら？」

ランサー？冬木にいるランサーはクー・フリーンだったはずなのに目の前に立っているのはむしろ…

「あいつ…ライダーじゃないのか？」

ピンクの長い髪や高い身長。見た目はメデューサのそれと酷似している。

そして彼女によって石にされたと思われるワカメ頭の男。真名はメデューサで間違いないはずだ。なら必然的にライダーになるはずだが…

ただ一つ解せないのがあの鎌。ライダーの時は使っていなかった気がするが…

「知らないの？適性のあるクラスが複数あるなら別のクラスで呼ばれることもあるわ。例えば普段はランサーであるクーちゃんかキャスターで呼ばれる可能性だって…」

「お困りのようだな、坊主。ちよつくら俺が力を貸してーメイヴ!?何でオメーがいるんだ!!」

「クーちゃん!!マスター、見つけたわ!あれがキャスターのクーちゃんよ!マスター!!」  
メイヴがやたら嬉しそうに俺の背中をバシバシ叩きながらクー・フリーンを指差した。そうか、あれがキャスターのクー・フリーンか。

いつもの魔槍『ゲイ・ボルク』はなく、代わりにルーンらしきものが刻まれた杖を持っている。そして青いローブを羽織っており、ランサーの時とは打って変わってまさにキャスターと言わなければならない。

「キャスターであろうとクーちゃんがいれば百人力よ!」



「おい、メイヴ。百人…何だっけ？」

明らかにクー・フリーンはこちらに敵意を抱いている。あろうことか矛先をこちらに向けようとしている。

「くつ、よりにもよってキャスターの時にお前と会うとはな。やつの幸運もあるだろうが…とことんついてねえな、俺」

杖を回し、まるで槍のように扱い…ん？これってやつば俺達に向いてる？

「まさかこんな所に思わぬ伏兵がいたとはな！かかって来い、女王メイヴ!!」

案の定クー・フリーンは敵となった。